

家族と子どもの社会情緒的発達 —縦断的デザインによる検討—

本島 優子・川崎 裕美・大槻 綾

1. 問題

家族は、子どもにとって、もっとも身近で直接的な、重要な社会的文脈の場であり、子どもの健全な心理的発達を支えるうえで、非常に重要な役割を果たしている (Schaffer, 1998)。良好な家族関係や健全な家族機能は、子どもの健やかな発達や精神的安定を促進する重要な保護要因であるといえよう。とりわけ、家族内の情緒的なやりとりの質や雰囲気は、子どもの発達に促進的もしくは阻害的に働く可能性があるといわれている (遠藤・田中, 2005)。たとえば、家族内の葛藤や争いが激しく、家族成員間 (主に両親間) の暴力に曝されている子どもたちは、たとえ子ども自身が直接的な暴力の被害者でなかったとしても、さまざまな心理的問題や困難を示すという (Farver, Xu, Eppe, Fernandez, & Schwartz, 2005)。特に社会情緒的な側面の発達に著しい問題を示し、家族内の暴力に曝されている子どもは、攻撃行動や心理的苦痛、社会的コンピテンス (Farver et al., 2005)、外在化行動、内在化行動 (Koblinsky, Kuvalanka, & Randolph, 2006) などに問題を示すことが報告されている。家族内で葛藤や不和が激しく、常に暴力や争いが絶え間ない家庭では、怒りや憎しみ、悲しみなどの否定的情動が主となってその家族全体の情緒的雰囲気を形成していると考えられる。当然、このような雰囲気 of 家庭の中で育つ子どもは、温かく調和的な雰囲気 of 家庭の中で育つ子どもと比べて、その発達に異なる帰結がもたらされるのではないかと考えられる。家族の情緒的なテーマは、子どもの情動発達に影響を及ぼす (Emde, 1993) といわれているように、家族内の情緒的なやりとりの質や家族全体の情緒的な雰囲気は、家族という文脈の中で発達していく子どもにとって、一定の影響を及ぼし得るのではないかと考えられる。

しかし、こうした問いの重要性にもかかわらず、家族の情緒的雰囲気が子どもの発達にどのように影響するのかについて、実証レベルで検討した研究はあまり多くない。さらには、乳児を持つ家族を対象に縦断的にその検証を試みた研究はさらに少ない。そこで、本研究では、乳児を持つ母親を対象に、生後 9 ヶ月において母親が認知した家族の情緒的雰囲気が、子どもの社会情緒的発達、特に 18 ヶ月の子どものアタッチメント安

定性や 30 ヶ月の子どもの問題行動にどのように影響するのかについて縦断的に検討することを第一の目的とする。

さらに、本研究では、家族の情緒的雰囲気が子どもの発達に及ぼす直接的影響に加えて、母親の心理的機能を通して子どもの発達に間接的に影響を及ぼす経路についても検証したいと考える。母親は、多くの場合、子どもにとって主要な養育者であり、特に乳幼児期においては、子どもは身体的にも心理的にも母親に大部分依存している。家族内の葛藤や不和、緊張状態などの否定的な雰囲気は、母親に無力感や恐怖、ストレスを与え、それらは抑うつとなって現れると考えられる (Farver et al., 2005)。そうした母親の抑うつは、適切性の欠いた養育行動と関連することが数多くの研究で指摘されており、さらには、子どもの発達にも否定的な影響を及ぼすことが広く知られている (Farver et al., 2005)。そのため、家族の情緒的雰囲気は、母親の心理的機能、特に抑うつに影響し、ひいては子どもの発達にも否定的な影響を及ぼすのではないかと考えられる。そこで、本研究では、家族の情緒的雰囲気が母親の抑うつを媒介として子どもの社会情緒的発達にどのように影響を及ぼすのか、間接経路のモデルについても検討を行いたいと考える。

2. 目的

本研究では、家族内の情緒的なやりとりの質や雰囲気について焦点を当て、以下の二点について明らかにすべく実証的検討を行う。

- ① 生後 9 ヶ月に母親によって評定された家族の情緒的雰囲気が、生後 18 ヶ月及び 30 ヶ月の子どもの社会情緒的発達にどのように影響するのかについて検討を行う。
- ② 生後 9 ヶ月に母親によって評定された家族の情緒的雰囲気が、生後 18 ヶ月の母親の抑うつを介して、生後 18 ヶ月及び 30 ヶ月の子どもの社会情緒的発達にどのように間接的に影響するのかについて検討を行う。

なお、本研究では、子どもの社会情緒的発達の指標として、生後 18 ヶ月の子どものアタッチメント安定性と生後 30 ヶ月の子どもの内在化行動および外在化行動を取り上げることとする。

3. 方法

本研究は、07 年度のコロキウム研究 (本島・石井・川崎・大槻、2008) において行った家族と子どもの発達に関する研究をさらに発展的に追跡研究したものである。本研究のデータの一部についてはすでに昨年度の研究活動において調査実施済みであり、本年度は主に生後 30 ヶ月のデータについて新たに収集・分析を行ったことに注意されたい。

(1) 研究協力者

生後 9 ヶ月時点での研究協力者は、母親 34 人とその子ども 36 人であった。うち、2 ケースが二卵性双生児であった（以下、生後 18 ヶ月および 30 ヶ月の調査においても含まれる）。第 1 子 22 人、第 2・3 子 14 人。男児 20 人、女児 16 人。母親の平均年齢は 31.34 歳 ($SD=3.23$) であった。18 ヶ月時点での研究協力者は、母親 33 人とその子ども 35 人であった。30 ヶ月時点での研究協力者は、母親 27 人とその子ども 29 人であった。

(2) 手続き

生後 9 ヶ月に調査者が家庭訪問をし、母親へのインタビューと母子自由遊び場面のビデオ観察を行った後、母親に家族の情緒的雰囲気や夫婦関係、ソーシャルサポートに関する質問紙を手渡し、後日郵送での返信をお願いした。

生後 18 ヶ月に調査者が再度家庭訪問をし、母親へのインタビューを行った後、子どものアタッチメント安定性を測定するため、日常の母子相互作用場面における子どもの行動について約 2 時間程度の自然観察を行った。観察後、母親に子どもの気質や母親の抑うつ・不安に関する質問紙を手渡し、後日郵送での返信をお願いした。

生後 30 ヶ月に調査者が再度家庭訪問をし、問題解決場面や自由遊び場面のビデオ観察を行った後、母親の抑うつや不安、子どもの問題行動に関する質問紙に、その場で回答してもらった。

(3) 測度

①家族の情緒的風土（生後 9 ヶ月）

Cassidy が作成した家族の情緒的雰囲気に関する質問紙を日本語に翻訳して使用した。家族のポジティブな雰囲気に関する 10 項目（たとえば、「何かとても楽しいことがあった時には、それを家族に話す」「家族の誰かが沈んでいるような時には元気づけようとする」）、ネガティブな雰囲気に関する 10 項目（たとえば、「家族の誰かに対して嫌悪感をはっきり示すことがある」「不愉快なけんかをして泣くことがある」）に関して、それぞれ「1. まったく当てはまらない」から「7. とても当てはまる」まで 7 段階での評定を母親に求めた。そして、ポジティブな雰囲気、ネガティブな雰囲気ごとに、合計得点を算出した。

②母親の抑うつ（生後 18 ヶ月）

ベック抑うつ尺度の日本語版（林、1988）を使用した。0～3 の 4 段階評定で、母親による自己報告を求めた。そして、全 21 項目の加算値を算出した。なお、得点が高いほど、抑うつの症状が重いことを表す。

③子どものアタッチメント安定性（生後 18 ヶ月）

生後 18 ヶ月に家庭訪問を行い、母子相互作用場面における子どもの行動について約 2 時間程度の自然観察を行った。母親には普段通りに自然に過ごしてもらうようお願いし、日常の生活場面（遊び、食事、家事、散歩、買物など）を観察した。家庭訪問での観察後、Waters(1995)のアタッチメント Q ソート法(AQS)を用いて、子どもの行動に関する 90 枚のカードを、「1. まったく当てはまらない」から「9. 非常に当てはまる」まで、各段階に 10 枚ずつ分類した。そして、各段階に分類されたカードにその段階の得点を付与した。標準的な分析手続き(Waters, 1995)に従い、専門家によって評定された“理想的にもっともアタッチメントが安定していると想定される子ども”の得点分布と実際の観察で得られた子どもの得点分布との相関係数を算出し、Fisher's r -to- z に変換された値を、子どものアタッチメント安定性得点とした。アタッチメント安定性得点はおおよそ -1.00~1.00 の値をとり、得点が高いほど、安定したアタッチメントを表す。

④子どもの問題行動（生後 30 ヶ月）

子どもの情緒的・行動的問題に関して、Achenbach (1992) の「Child Behavior Checklist : CBCL」の質問紙を用いて、母親に評定を求めた。CBCL は 99 項目の子どもの行動について、「0. 当てはまらない」「1. やや当てはまる」「3. よく当てはまる」の 3 段階評定で回答するものである。本研究では、CBCL の下位尺度のうち、子どもの内在化行動（不安／抑うつ・引きこもり）に関する 25 項目（たとえば、「おとなにしがみついたり、ずっとべったりしている」「気持ちが傷つきやすい」「親から離れると、ひどく混乱する」「あまり人に愛情を示さない」など）、外在化行動（攻撃行動・破壊行動）に関する 26 項目（たとえば、「ものを壊す」「反抗的である」「言うことを聞かない」「よくケンカをする」など）を分析の対象とし、これらの下位尺度得点について算出した。

4. 結果

（1）各変数の平均値

母親の評定した家族の情緒的雰囲気、母親の抑うつ、子どものアタッチメント安定性得点、子どもの内在化行動および外在化行動の平均値と標準偏差について Table 1 に示す。

（2）各変数間の相関関係

次に、各変数間の関連性について、ピアソンの相関係数を求めたところ、結果は Table 2 の通りとなった。

Table1 各変数の平均値と標準偏差

	N	平均値	標準偏差
家族のポジティブ雰囲気	34	60.97	7.12
家族のネガティブ雰囲気	34	33.53	9.33
母親の抑うつ	30	9.76	6.11
子どものアタッチメント安定性得点 (AQS)	35	0.43	0.24
子どもの内在化行動 (CBCL)	28	6.68	4.36
子どもの外在化行動 (CBCL)	28	10.54	5.90

相関分析の結果、生後 9 ヶ月に母親が認知した家族のポジティブな情緒的雰囲気は、18 ヶ月の母親の抑うつ、子どものアタッチメント安定性、生後 30 ヶ月の子どもの内在化行動、外在化行動いずれに対しても有意な相関関係が認められなかった。一方、生後 9 ヶ月に母親が認知した家族のネガティブな情緒的雰囲気は、生後 18 ヶ月における母親の抑うつと正相関していたが、生後 18 ヶ月の子どものアタッチメント安定性や生後 30 ヶ月の子どもの内在化行動、外在化行動とは有意な相関が認められなかった。次に、母親の抑うつに関しては、生後 18 ヶ月の母親の抑うつの高さが、同時期の子どものアタッチメント安定性と負相関し、さらには、生後 30 ヶ月の子どもの内在化行動および外在化行動と正相関していた。

Table2 各変数間の相関係数

	ポジティブ 雰囲気	ネガティブ 雰囲気	抑うつ	アタッチメント 安定性	内在化行動
ネガティブ 雰囲気	-.43** (N=34)	----	----	----	----
抑うつ	.02 (N=30)	.36* (N=30)	----	----	----
アタッチメント 安定性	.07 (N=35)	-.07 (N=35)	-.44** (N=35)	----	----
内在化行動	-.12 (N=28)	.14 (N=28)	.41* (N=28)	-.24 (N=28)	----
外在化行動	-.29 (N=28)	.18 (N=28)	.40* (N=28)	-.26 (N=28)	.51** (N=28)

*p<.05, **p<.01

これらの相関結果より、家族のポジティブな情緒的雰囲気およびネガティブな情緒的雰囲気は、子どものアタッチメント安定性や問題行動とは直接的な相関関係が見られなかったものの、家族のネガティブな情緒的雰囲気は、後の母親の抑うつと関連し、またその母親の抑うつが子どものアタッチメント安定性や問題行動と関連していたことから、家族の情緒的雰囲気は母親の抑うつを介して子どもの社会情緒的発達に間接的に影響を及ぼす可能性が考えられる。

（３）パス解析

相関分析より、家族の情緒的雰囲気は子どものアタッチメント安定性や問題行動と直接的な関連性は見られなかったものの、母親の抑うつを介して、子どもの社会情緒的発達に影響を及ぼしている可能性が示唆されたため、家族の情緒的雰囲気が母親の抑うつを媒介として、子どもの発達にどのように影響するかを検討するため、Figure1 のようなパス解析を行った。

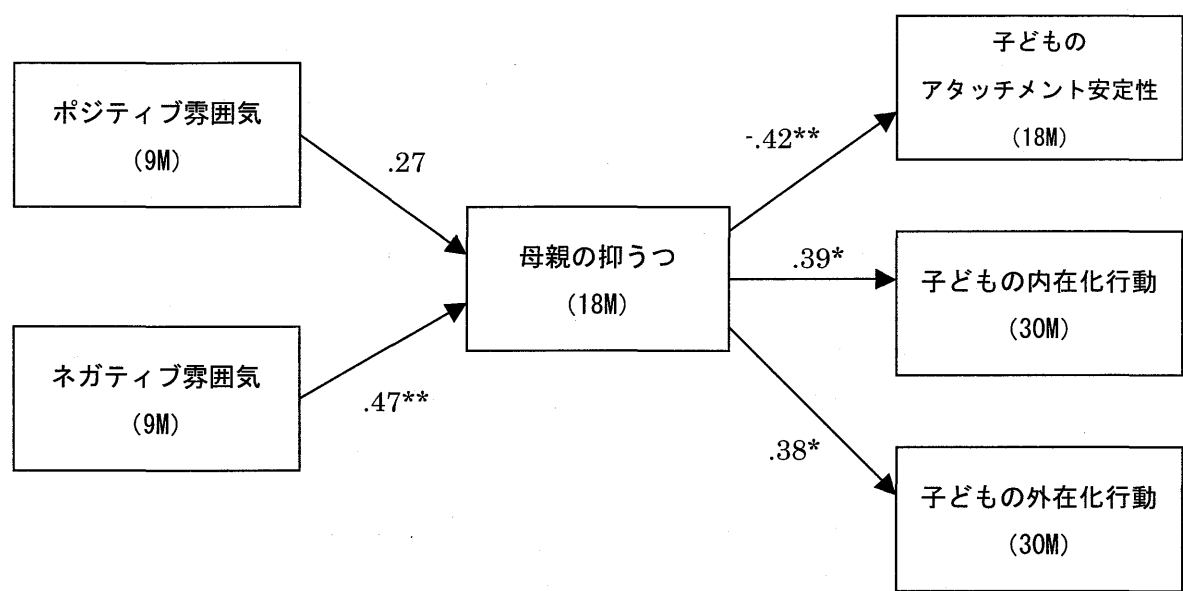


Figure1 家族の情緒的雰囲気、母親の抑うつ、子どものアタッチメント安定性、問題行動に関するパス解析の結果

結果、生後 9 ヶ月における家族のポジティブな情緒的雰囲気は、生後 18 ヶ月における母親の抑うつと関連性は見られなかったものの、ネガティブな情緒的雰囲気は、母親の抑うつと有意に関連しており、生後 9 ヶ月時点で家族のネガティブな情緒的雰囲気が高いほど、生後 18 ヶ月の母親の抑うつが高かったことが示された。そして、生後 18

ヶ月の母親の抑うつの高さが、同時期の子どものアタッチメント安定性、生後 30 ヶ月の子どもの内在化行動、外在化行動といずれも有意に関連しており、生後 18 ヶ月時点で母親の抑うつが高いほど、子どものアタッチメント安定性が低く、生後 30 ヶ月の子どもの内在化行動や外在化行動がより多く見られたことが示された。これらの結果より、家族のネガティブな情緒的雰囲気は、母親の抑うつを媒介として、子どものアタッチメント安定性や問題行動に間接的に影響することが確かめられたといえる。

5. 考察

本研究では、家族の情緒的雰囲気が子どもの社会情緒的発達、特にアタッチメント安定性や問題行動にどのように影響するかについて検討するため、家族の情緒的雰囲気が子どもの社会情緒的発達に直接的に影響を及ぼす経路と、家族の情緒的雰囲気が母親の抑うつを介して子どもの社会情緒的発達に間接的に影響を及ぼす経路を想定し、縦断的検討を行った。その結果、9 ヶ月時点で母親が認知した家族のポジティブな情緒的雰囲気、ネガティブな情緒的雰囲気いずれも、18 ヶ月時の子どものアタッチメント安定性や 30 ヶ月時の子どもの内在化行動、外在化行動と直接的に関連はしていなかった。しかし、9 ヶ月における家族のネガティブな情緒的雰囲気は、18 ヶ月時点での母親の抑うつに影響し、ひいては 18 ヶ月時の子どものアタッチメント安定性や 30 ヶ月時の子どもの内在化行動や外在化行動に影響しており、母親の抑うつが媒介的役割を果たしていることが確かめられた。すなわち、9 ヶ月に母親が認知した家族のネガティブな情緒的雰囲気が高いほど、18 ヶ月時点での母親の抑うつが高くなり、ひいては、母親の抑うつが高いほど、18 ヶ月時の子どものアタッチメント安定性が低かったり、30 ヶ月時の子どもの内在化行動や外在化行動が多かったという関連性が見出されたのである。これらの結果より、家族の情緒的雰囲気は、子どもの社会情緒的発達に直接的に影響はしないものの、母親の抑うつを介して、子どもの社会情緒的発達に間接的に影響を及ぼすことが確かめられたといえよう。

家族の情緒的雰囲気が子どもの社会情緒的発達に直接的な影響が見られなかったことに関しては、家族の情緒的雰囲気は子どもの発達に直接的に影響するというよりは、家族全体の雰囲気が、たとえば母親や父親の子どもに対する養育行動に影響し、ひいては子どもの発達に影響を及ぼすという影響の仕方の方が可能性として高いのかもしれない。たとえば、家族の情緒的雰囲気を規定する主要な要因として考えられる夫婦関係に関しては、夫婦関係が直接子どものアタッチメントに影響する経路よりも、養育行動を介して子どものアタッチメントに影響を及ぼすという間接経路のモデルの方がより多く報告されているという(数井、2005)。そのため、家族の情緒的雰囲気に関しても、たとえ家族の情緒的雰囲気が調和的で温かいものであったとしても、親の子どもに対する敏感性が低ければ、子どもの発達に促進的に働く可能性は少ないであろうし、反対に、

家族全体の雰囲気は葛藤や緊張に満ちたものであったとしても、親の子どもに対する感受性が著しく低くなければ、必ずしも子どもの発達に阻害的に作用するとは限らないのかもしれない。この点に関しては、推測の域を出ず、今後実際に親の行動を測定し、親の行動を媒介として子どもの発達にどのような影響があるのかについて、実証的に検討を行ってみる必要があるだろう。

一方、本研究では、家族の情緒的雰囲気は子どもの発達に直接的な影響を及ぼさなかったものの、母親の抑うつを介して子どもの社会情緒的発達に影響を及ぼすという間接経路のモデルが確かめられた。すなわち、家族のネガティブな情緒的雰囲気が、母親の抑うつを高め、ひいては子どものアタッチメント安定性の低さや問題行動の多さと関連していたのである。家族内の葛藤や不和、緊張状態などの否定的な雰囲気は、母親に無力感や恐怖、ストレスを与え、それらが抑うつとなって現われることはある意味当然のことかもしれない。また旧来より、母親の抑うつは子どもの発達にさまざまな否定的影響を及ぼすことが広く知られており (e.g. Schaffer, 1998)、本研究においても、母親の抑うつが高いほど、子どものアタッチメント安定性が低かったり、子どもの内在化行動や外在化行動が多かったりと、母親の抑うつが子どもの社会情緒的発達に阻害的に作用することが確かめられたといえよう。ただし、本研究では、家族のポジティブな情緒的雰囲気は母親の抑うつと関連しておらず、家族全体のポジティブな雰囲気が母親の抑うつを軽減するといった影響は確かめられなかった。そのため、母親の精神的健康に影響を及ぼす家族的要因は、家族全体が葛藤や緊張に満ちたネガティブな雰囲気であるといったことがより強い影響力を持っており、そのことが母親の抑うつと結びつきやすいといえるであろう。本研究では、家族のネガティブな情緒的雰囲気は子どもの発達に直接的影響は及ぼさなかったものの、それが母親の抑うつと結びつくとき、子どもの社会情緒的発達に否定的影響を及ぼすことが確かめられ、間接的ではあるが、家族のネガティブな情緒的雰囲気は、子どもの発達に阻害的に作用する可能性が高いことが示されたといえよう。

6. 今後の課題

本研究では、家族の情緒的雰囲気が子どもの社会情緒的発達にどのように影響するのかについて縦断的に検討を行った。その結果、家族のポジティブな情緒的雰囲気、ネガティブな情緒的雰囲気いずれも、子どものアタッチメント安定性や問題行動に直接的に影響を及ぼすことはなかったものの、家族のネガティブな情緒的雰囲気が、母親の抑うつを介して子どもの社会情緒的発達に影響を及ぼすという間接経路のモデルが確かめられた。しかし、媒介要因として、母親の抑うつ以外にも、母親の子どもに対する養育行動が媒介となって子どもの発達に影響している可能性も考えられ、今後は母親の養育行動を測定し、家族の情緒的雰囲気が母親の行動を介して子どもの社会情緒的発達にどの

ように影響しているのかについて実証的に検討を試みる必要があるだろう。

引用文献

- Achenbach, T.M. (1992). *Manual for the child behavior checklist/2-3 and 1992 profile*. Burlington, VT: University of Vermont Department of Psychiatry.
- Emde, R. N. (1993). Infant emotions and the caregiving environment. In R.N. Emde, J.D. Osofsky, & P.M. Buttuerfield (Eds.), *The IFEEL Pictures: a new instrument for interpreting emotions* (pp.27-49). Madison: International Universities Press.
- 遠藤利彦・田中亜希子 (2005). アタッチメントの個人差とそれを規定する諸要因. 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.
- 林潔 (1988). Beck の認知療法を基とした学生の抑うつについての処置 学生相談研究, 9, 97-107.
- Farver, J.A.M., Xu, Y., Eppe, S. Fernandez, A., & Schwartz, D. (2005). Community violence, family conflict, and preschoolers' socioemotional functioning. *Developmental Psychology*, 41, 160-170.
- 数井みゆき (2005). 親世代におけるアタッチメント. 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.
- Koblinsky, S.A., Kuvalanka, K.A., & Randolph, S.M. (2006). Social skills and behavior problems of urban, African American preschoolers: role of parenting practices, family conflict, and maternal depression. *American Journal of Orthopsychiatry*, 76, 554-563.
- Schaffer, H.R. (2001). 子どもの養育に心理学がいえること (無藤隆・佐藤恵理子, 新曜社 (Schaffer,R.(1998). *Making Decisions about children*.England:Blackwell.)).
- Waters,E. (1995). The Attachment Q-Set. In E.Waters, B.E.Vaughn, G.Posada, & K.Kondo-Ikemura(Eds.), *Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 60(2-3, serial No.2449, 247-254.

謝辞

本研究にご協力いただいたお母さまとお子さんに心より感謝申し上げます。